

農 大

だより

令和 8 年 2 月 1 日発行
愛知県立農業大学校

〒444-0802 岡崎市美合町並松1-2
Tel : 0564-51-1601 Fax : 0564-51-4831
E-mail noudai@pref.aichi.lg.jp
ホームページ : <https://www.pref.aichi.jp/soshiki/noudai/>

令和 7 (2 0 2 5) 年度版



露地野菜専攻



CONTENTS

- 1 専攻紹介 (露地野菜)
- 2 特 集
卒論発表会
- 3 専攻トピックス
- 4 トピックス
- 5 SNS 投稿 diary

愛知県立農業大学校
公式HP



Instagram



X (旧 Twitter)



専攻紹介

露地野菜専攻

露地野菜専攻は、愛知県が日本一の生産を誇るキャベツなどの露地野菜栽培とイチゴの促成栽培を行っています。

農業の未来を担う学生28人(2年生13人、1年生15人)がメンバーです。

ほ場の広さは1.5haと広大で、季節に応じて様々な品種を栽培しています。その数は40品目にもなり農大での専攻実習を通してこれらの栽培方法を学ぶことができます。

大きな面積の栽培に適した機械化やイチゴの栽培では環境制御技術の導入も行っています。また、多品目の栽培方法など日々多くのことを学びながら、栽培だけでなく売り方やブランド化など販売方法の工夫も学んでいます。



専攻実習の様子



機械化



大きなトラクターを使った耕運、乗用の農薬散布機での防除など様々な機械を使うことができ、昨年度からはGPSトラクターも導入されスマート農業も学べます。



【機械の種類】

乗用農薬散布機、トラクター(70馬力)、ジャガイモ掘機、巻取り式動力噴霧器、プラソイラー、マルチ張り機など



販売促進

珍しい野菜の栽培も行っているため、お客さんが買いたくなるようなポップを作成し販売促進を図っています。



【ブランド化】

大玉イチゴ専用パッケージを作り付加価値化

イチゴの設備



農大のイチゴはとても甘く好評です。炭酸ガス発生装置やモニタリング機器など環境制御を学べる設備が整っています。

【農大イチゴ栽培について】

- ・ 完熟出荷で糖度が高く甘い
- ・ 炭酸ガスを施用し光合成を促進
- ・ 愛知県で栽培される4品種を学ぶことができる



イチゴの給液管理



モニタリングデータのチェック



多様な品目

栽培品目は40品目以上。自分の育てたい野菜をこだわって作っています。



キャベツの収穫



ダイコンの収穫



イチゴの調査

【栽培品目】

キャベツ、ブロッコリー、イチゴ、スイートコーン、カリフラワー、ナス、キュウリ、オクラ、ズッキーニ、スイカ、メロン、アスパラガス、バレイショ、タマネギ、ホウレンソウ、ダイコン、コマツナ、ネギ、チンゲンサイ、レタス、ハクサイ、エダマメ、インゲン、ラッカセイ等

卒論発表会 ～わたしたちのプロジェクト～



令和7年度卒業論文発表会を、12月16日(火)に、中央教育棟大講義室において開催しました。

農学科では、2年生全員が1人1課題以上のプロジェクト活動に取り組みます。日頃、実習の中で学生自らが感じた疑問点や改善点を課題に取り上げ、その探究・解決に向けて実施した研究の結果を卒業論文にまとめます。発表会では、各専攻から選ばれた2年生9名が10分間の持ち時間でプレゼンテーションを行いました。

当日は、司会や時間計測など、発表会の運営を有志の1年生が担当しました。また、県内農業系高校の先生方もお招きしており、農大生の研究成果を発信する良い機会となりました。

発表者は、緊張しながらも、自信に満ちた発表を行いました。質疑応答では、審査委員や学生から活発に質問が投げかけられ、時間が足りないほどでした。その都度、発表者は的確に回答していました。

審査の結果、最優秀賞1名と優秀賞2名を選出しました。最優秀賞の潮見さんの課題は、和歌山県立農大で開催される「東海・近畿ブロック農業大学校研究発表会」(1月15～16日開催)に本校代表として発表します。



① 小笠原 陸

(鉢物・緑花木専攻)

ニューギニアインパチェンスの
鉢上げ回数が生育に及ぼす影響



② 金原 太一

(施設野菜専攻)

大玉トマトにおける品種の違いと増枝に伴う給
液量の違いが黄変果の発生や収量に及ぼす影響



③ 山本 杏桜

(酪農専攻)

外部乳頭シールと毛刈りの
併用による乳房炎対策



優秀賞 (卒論要旨は次頁以降)

④ 毛利 碧良

(作物専攻)

「あいちのこころ」に
おける緑肥栽培の検討



発表者の皆さん

○ **数字**は発表順

⑤ 内藤 愛陽

(切花専攻)

バラの芽整理が品種・
収穫本数に及ぼす影響



優秀賞 (卒論要旨は次頁以降)

⑥ 潮見 夢葉

(養豚・養鶏専攻)

環境衛生向上による
豚胸膜肺炎のコントロール



最優秀賞 (卒論要旨は次頁以降)

⑦ 田中 咲良

(果樹専攻)

ブルーベリーのポット栽培における
収穫前の雨水制限による裂果対策の検討



⑧ 宮本 茜

(露地野菜専攻)

イチゴの芽数が
収量と品質に与える影響



⑨ 原田 颯希

(養豚・養鶏専攻)

卵用名古屋種の野外平飼い飼育
が産卵性に及ぼす影響



最優秀賞 潮見 夢葉 (養豚・養鶏専攻)

課題名 「環境衛生向上による豚胸膜肺炎のコントロール」

○ 課題設定の理由

疾病の発生は養豚経営に様々な悪影響を及ぼす。本校でも疾病予防のためワクチン接種や環境衛生向上のため多大なコストと労力をかけて管理を行っている。近年の物価高騰の中、経営を維持、発展させるためには経費削減に取り組むことが重要な課題となっている。そこで今試験では労力、コスト削減に向けてワクチンに依存しない疾病コントロールを目指し、環境衛生向上対策について検討を行った。

○ 実施方法

試験1 豚房消毒の検討

豚房を①水洗 ②水洗+逆性石けん消毒(アストップ) ③水洗+アルデヒド系消毒薬(グルタプラス) ④水洗+アストップ消毒+石灰乳の4つの方法で洗浄後、豚房床3か所を滅菌綿棒で拭い(5×5 cm)、滅菌生理食塩水に懸濁し、その懸濁液100 μ lを普通寒天培地に37°C、24時間培養し細菌数を測定した。



試験2 空間消毒の検討

逆性石けん消毒液(1000倍希釈)をシステム豚舎全体(392 m²)に100 l噴霧し、噴霧前、噴霧1及び3時間後に肉豚房前通路3か所について試験2と同様に細菌数を測定した。

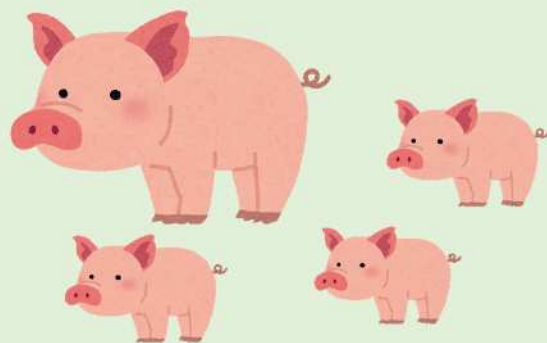
試験3 ワクチンプログラムの検討

離乳時にワクチン接種群と非接種群(各群12頭、平均体重差0.5 kg以内)に群分けし、①体重(30、70、120、150日齢) ②血清中豚胸膜肺炎抗体(30、60、90、120日齢) ③出荷後肺病変の調査を行った。

○ 考察

豚房の水洗、消毒に加え石灰塗布することで豚房細菌数は大きく低下した。さらに豚舎空間消毒を実施することで空間の細菌数が有意に減少し、衛生的な畜舎環境を維持することができると考えられる。

ワクチン非接種群においても明らかな感染抗体の上昇及び肺の病変がなかったことやワクチン接種群と同等な発育を示したことから、ワクチンを接種しなくても環境衛生を向上させることにより豚胸膜肺炎のコントロールの可能性があると考えられた。また、ワクチンをカットすることにより、農大においてはワクチン代年間約14万円、愛知県の平均的な母豚170頭規模の農家では年間約170万円のワクチン代削減ができると考えられる。



優秀賞 山本 杏桜 (酪農専攻)

課題名 「外部乳頭シールと毛刈りの併用による乳房炎対策」

○ 課題設定の理由

乳房炎は病原微生物が乳頭口から侵入し、乳房に炎症を起こす疾病で、乳牛の疾病の中で最も発生が多い。乳房炎が発生すると、乳量が低下するとともに、医薬品の使用により生乳の出荷が制限されるため経済的な損失が大きい。そのため、適正な管理による予防が最も重要である。

本試験では、乳房炎の感染リスクが最も高い分娩前における予防対策を確立するため、過去に本校で調査・検討した対策を併用することによって予防効果が向上するかどうか調査を行った。

○ 実施方法

(1) 試験期間

令和7年1月から11月

(2) 供試牛

試験区5頭20分房、対照区5頭20分房とし、未經産牛及び初産牛を各区に均等に割り振った。

(3) 試験方法

乳房炎予防対策として、試験区は分娩3週間前に

①外部乳頭シールの装着及び②乳房の毛刈りを実施した。対照区は無処置とした。

(4) 調査項目

分娩後に乳房衛生スコアと乳房炎罹患状況を調査し、乳房炎の予防効果を比較した。



○ 考察

外部乳頭シールは、牛の活動により剥離することがあるため、再装着するまでの間に病原微生物に感染するリスクがある。そのため、過去の調査では十分な乳房炎予防効果が見られなかった。本試験では、乳房の毛刈りを併用することで糞尿等による汚れが低減し、シール脱落時における感染予防効果が向上したと考えられた。



優秀賞 内藤 愛陽 (切花専攻)

課題名 「バラの芽整理が品質・収穫本数に及ぼす影響」

○ 課題設定の理由

切花用バラ生産において一般的な仕立て方法として用いられるアーチング方式は、樹形管理がしやすく収穫本数を確保しやすいメリットがある一方、一株の中で収穫物となる枝が発生する部分が限られており、一株からたくさんの芽が一度に発生すると混みあって1本1本が十分に育たないというデメリットがある。そこで、本校の実習では、品質向上を目的に、1株から一度に発生する芽が3本程度になるよう、余分な芽を切り取っている(以下、芽整理と呼ぶ)。最適な芽整理の方法は不明であるため芽整理の実施の有無や、整理本数を変更した場合に、品質、収穫本数および収益性にどのような影響を及ぼすかを調査した。

○ 実施方法

スプレーバラの「ファンシーローラ」(2年目)を用いた。ロックウール耕で試験開始日5月28日に試験区の芽をすべて切り取り、2~3週間後に芽整理を行いそれぞれ1本区、2本区、3本区、放任区を設置した。1試験区あたり20株とした。試験は各区の収穫が終了するたびに芽整理を実施して、3回目まで調査を継続した。



○ 考察

全ての調査項目で、1本区が最も品質が良い結果になると予想しており、平均の切花長、茎径、輪数はそのとおりだったが、上位階級の収穫本数が多い傾向だったのは3本区であった。このことから、芽を1本や2本に整理しても必ずしもすべての切花の品質が向上するわけではないと考えることができる。また、収穫本数と収益性では、放任区が最も優れていた。



以上のことから、芽整理は品質向上に有効であるが、アーチング方式では芽整理は基本的に不要だとわかった。ただし、今回は5月~10月の高温期の調査だったことや、密集するため病害虫が発生しやすい、輪数が少ない、収穫日が遅くなるなど長期的にみると品質や収益性が低下する可能性がある。年間通した場合の影響や品種による違いは今後検討する必要がある。

審査講評

各専攻代表9名の話し方や発表態度は素晴らしく、テーマ設定も適切で、調査研究や結果の考察もよくできていました。

最優秀賞の潮見さん(養豚・養鶏専攻)は、畜産総合センターと連携し、環境衛生の改善によって豚胸膜肺炎の発生を抑える可能性を示しました。これはワクチン接種の労力やコスト削減につながり、農家への普及性もあり高く評価されました。潮見さんには東海近畿ブロック大会に出場し、その先の全国大会も目指して、愛知農大の代表として力を発揮してほしいと思います。

優秀賞の山本さん(酪農専攻)は、乳房炎対策において、過去に本校で検討した複数の方法を併用することで感染予防効果を高めた点が評価されました。乳房炎は乳出荷制限による経済的損失が大きく、現場での実践的な成果として意義深い研究でした。同じく優秀賞の内藤さん(切花専攻)は、本校で当然とされていたバラのアーチング方式による芽整理について、収益性の観点からも不要であることを示し、さらに現場でも芽整理を行わない農家があることを確認しました。他の発表もそれぞれに創意工夫が見られ、入賞発表と比較しても甲乙つけがたい内容でした。

次年度への期待として、経営視点を取り入れた課題や、試験研究機関・企業との連携、専攻内で複数人が同じ課題に取り組むなど、ワクワクするプロジェクト学習が増えることを願っています。そして、全国大会で愛知農大の名を広めてくれることを期待します。

卒業論文研究と発表は、2年間の学びの集大成です。2年生の皆さんは、研究で培った「問題解決力」と、やり遂げたことで得た「自信」を武器に、社会へ大きく羽ばたいてください。

校長 島岡 勝隆

専攻トピックス

最近の各専攻で話題になったことや実習風景などをお届けします！

○専攻別学生数

(注)カッコ内は女子の内数

区分	鉢物・緑花木	切花	作物	果樹	露地野菜	施設野菜	酪農	養豚・養鶏	計
1年	7(0)	9(2)	6(1)	15(4)	15(3)	13(2)	16(11)	8(3)	89(26)
2年	6(0)	8(2)	8(2)	13(3)	13(4)	15(2)	9(4)	4(4)	76(21)
計	13(0)	17(4)	14(3)	28(7)	28(7)	28(4)	25(15)	12(7)	165(47)



鉢物・緑花木

これからの実習販売は1年生主体で頑張ります！

卒業を間近に控えた2年生に代わり、1月からは1年生が実習販売を仕切っています。商品の決定、準備、接客、会計など責任の伴う内容が多く、特に接客や会計は緊張する様子もみられますが、みんな積極的に取り組んでいます。自分自身で育てた鉢物や花壇苗が売れると達成感を得られてとてもうれしいと感じているようです。寒い日が続いている中でも学生が頑張っているのぜひ見に来てください！



切花

冬作の片付けが終わりました

切花専攻では、出荷作業を行う流通センターの前に約200㎡の露地畑があります。この畑では冬作のハボタンを栽培しており、1月中旬に年末用に作ったハボタンを一年生全員で片付けました。片付けの後には新年度に向けて作付け計画を学生たちと考えます。次期作は何を作るのか楽しみです。





声 かけ

露地野菜専攻では2年間の学生生活の中で実習作業をやり切る「根性」、効率よく協力するための互いの「声かけ」、相手に現状やしてほしいことを伝える「説明」を学んでほしいと考えています。

2年生が卒業論文等の作成で忙しくなり1年生だけで実習を行うことが多くなりました。今まで1、2年合わせ28人だったのが約半数の15人になりましたが、行わなければならない実習作業の量は変わりません。このため1年生の皆は作業を効率よく行う意識が高まっています。「根性」はついたためこの機に「声かけ」ができるように頑張してほしいです。



施設、露地野菜専攻が合同で卒業論文発表会を開催！

施設、露地野菜専攻が合同で卒業論文発表会を開催しました。農大全体での発表会と同様に、発表者はスーツを着用して緊張感を持って実施しました。

合同で実施したことで他専攻の学生にもわかりやすく伝えられるように図表等を工夫して発表していました。

各専攻でお互いに栽培したことのない作物や調査研究の考え方に触れることができ良い刺激となったようです。

1年生には2年生みたいに堂々と発表できるようにプロジェクトをしっかり頑張してほしいです。



大豆の収穫を実施

大豆の収穫作業を実施しました。大豆の収穫には汎用コンバインを使用するため、近隣のオペレータからお借りして、収穫作業の実演を行いました。普段使用しているコンバインとの違いについて説明を受けた後、実際にコンバインを操作させていただきました。大豆は稲とは違い、地際部分にも豆ができるため、コンバインの刈刃の高さの調整に苦労していました。





田原に校外学習に行ってきました

1月21日、果樹専攻1年生は、田原市に校外学習に行きました。



午前中は、ハウスミカンと少加温の中晩柑ハウスを視察しました。ハウスミカンでは、11月上旬から12月中旬加温作型のハウスを3か所訪問し、摘果後の着花具合を見ることができました。花付きの多さに学生たちも驚いていました。中晩柑ハウスでは、せとかの試食をさせてもらい、その美味しさに感動しました。農大でもせとかを植え付け予定のため、管理のポイント等を園主さんから聞き取りました。

午後はハウスイチジクほ場を訪問し、アザミウマ防除や摘心管理についての話を聞きました。園主の天野さん、息子さん、従業員も農大卒業生で、元気に農業を営む姿が印象的でした。学生は、来年の栽培管理に活かそうと積極的に質問をしていました♪



牛の毛刈りを学びました

1月8日に酪農家の方々を講師にお招きして、牛の毛刈り講習会を行いました。



牛の毛刈りといっても、ただただバリカンで刈っていけばいいものではありません。すっきり見せたいところは残す毛の長さを短く、ふっくら見せたいところはあえて毛刈りをせず整えることもあり、刈り方によってかっこよくもみえるし、不格好にもみえてしまいます。毛の色によっても刈り方を変えることがあり、牛に合わせた刈り方を習得するのは、一朝一夕ではできません。

バリカンの扱いは難しく、刈りすぎや残しすぎでシマシマになってしまった牛もありましたが、これから毛刈りをしていない牛でたくさん練習して上達していきます。



車両消毒ゲートを設置しました

毎年、高病原性鳥インフルエンザが国内発生する中、農大ではその対策として、動力噴霧器及び車両消毒槽によるタイヤの消毒、校内や養鶏エリアの石灰散布、踏み込み消毒槽による足裏消毒等のウィルス侵入防止を実施しています。



養鶏エリアには、飼料運搬車や鶏卵出荷車が頻繁に出入りすることから、外部からのウィルス持ち込み防止を更に強化するため、養鶏エリア入口の一部を舗装し、車両消毒ゲートを設置しました。舗装により石灰の消毒効果を高め、車両消毒ゲートにより車両底面を含め車両全体に消毒液を噴霧することが可能となりました。

この時期は外気温が低く、石灰散布等の防疫作業は大変ですが、日頃から学生は鶏の管理技術の向上だけでなく、防疫意識の向上にも努めていきます。

トピックス

始業式を行いました

1月6日（火）に始業式を行いました。

島岡校長からは「1月以降の学校生活はあっという間に終わってしまう。2年生は、社会人になるための準備期間である卒業までの学校生活で自身を高める努力をして、新社会人生活に向けて頑張してほしい。1年生は2年生の技術を今のうちに受け継ぎ、今後は学校の中心となって活躍してほしい。農大に来て良かったと思えるような取組を引き続きやっていく。学生も学びを充実し大きく成長することを願っている。」との講話がありました。



第4回進路セミナーを開催しました ～社会人としてのマナーを学ぶ～

1月16日（金）、1年生を対象とした第4回進路セミナーを開催しました。

チエルコミュニケーションブリッジ株式会社の菊田隆之先生を講師に迎え、「社会人としての基礎的マナーを身につけるために」と題してご講義いただきました。

学生は就職活動等に相応しい服装としてスーツを着用し、まず、面接における身のこなしについて、きめ細かく説明を受けました。また、質問に答えるだけでなく面接官からの言葉に「はい」、「よろしくお願いいたします」といった一言が好印象を与えるので忘れずにとアドバイスがありました。

次に、社会人として必要な所作、名刺交換の仕方などについて説明を受けました。電話を受け方については、あまり慣れていない学生も多いと思われることから丁寧に説明がありました。

その後、講師から指名された学生が前に出て実技指導を受ける中、その様子を見て手元の資料にメモを取る学生の姿も見られました。



2月、3月の合同就職相談会をはじめとした就職活動等において、今回のセミナーで習い、身につけたことを生かして、それぞれの希望進路にチャレンジしてもらいたいと思います。

令和8年度海外派遣研修業者選定会議を開催しました

1月8日（木）に、令和8年度の海外派遣研修の企画業者を決定するため、海外派遣研修業者選定会議を開催しました。業者から研修内容や実施計画等についてプレゼンテーションを受け、慎重に審議を行いました。

令和8年度海外派遣研修は現1年生を対象に、令和9年1月下旬にオーストラリアで実施予定です。オーストラリアでのファームステイ研修を通して、現地での食生活や生活習慣、農作業等を体験します。学生は本研修での貴重な経験を通じて新しい知識や広い視野を身につけ、将来の就農や就職などに活かしていくことが期待されます。



モモの生産高度化研修を実施しました

12月24日（水）に本校大講義室において、モモの生産高度化研修を開催し、生産者・J A関係・県職員・学生など61名の参加がありました。

研修会では、まず「果樹胴枯細菌病（急性枯死症）と対策技術」について、農研機構の佐々木厚子上級研究員に講演いただきました。

モモ、リンゴ、ニホンナシにおいて、樹液の漏出を伴って樹勢が衰弱・枯死する果樹胴枯細菌病は、登録農薬がないことから、耕種的防除により病害が発生しにくい条件を整えることが重要とのことで、暗渠の設置等による土壌の排水性・通気性の改善、土壌中への微生物資材処理、菌密度低下のための温水処理等が有効な対策として紹介されました。

次に「クビアカツヤカミキリの防除対策」について、和歌山県果樹試験場かき・もも研究所の弘岡拓人主任研究員にご講演いただきました。

クビアカツヤカミキリは、2011年に初めて国内で発見された外来生物で、2025年には15都府県で被害が確認されています。産卵数が非常に多く、幼虫が樹木内部を食い荒らすので樹が弱ったり枯死したりするなどの深刻な被害がでます。毎日、地道に園地を見回り、成虫を見つけ次第、捕殺するといった注意点や、薬剤散布のポイント、被害樹の処理方法などの対策が示されました。

いずれの講演も参加者から多くの質問があり、研修後のアンケートでも「具体的な対策がわかりやすかった」「講演で聞いた農薬を試したい」など、生産者目線の多くの反響がありました。



東海・近畿ブロック農業大学校学生研究及び意見発表会が開催されました

1月15日（木）～16日（金）、令和7年度東海・近畿ブロック農業大学校学生研究及び意見発表会が和歌山農大で開催されました。

この大会は、東海、近畿の2府7県の農業大学校の代表が授業で取り組んだ研究の成果や農業経営、農村環境、就農等について日頃考えていることや思いについて発表するもので、本校からは研究発表の部に養豚・養鶏専攻2年生の潮見夢葉さん、意見発表の部で切花専攻1年生の太田創さんが代表として参加しました。

2人とも1年間取り組んできた研究の成果や自分の考えを堂々と発表し、審査員からの質問にも落ち着いて的確に答えていました。

結果は入賞には至りませんでしたでしたが、他の研究発表や意見発表を聞き、大いに刺激を受けたようでした。交流会も行われ、他府県の農大生と積極的に交流して親交を深め、たいへん有意義な発表会となりました。



農業者育成支援研修の閉講式を開催しました

農業者育成支援研修の閉講式を1月21日（水）に行いました。12名の研修生は、9か月間に亘り「消費者に安全で新鮮な野菜を提供する」という強い意気込みを持ちつつ、真夏の炎天下でスイカやキュウリの栽培に取り組みました。身をもって農業の大変さを学び、農業の魅力も感じる事ができたと思います。

研修生は、これから目指す「農業への夢」を胸に緊張した面持ちで閉講式に臨みました。その後、労いの言葉とともに終了証が手渡され、激励の式辞を受けて閉講式は終了しました。今後、全員が立派な農業者になってもらえることを期待します。



農福連携支援研修の閉講式を開催しました

1月21日に農福連携支援研修の閉講式を開催し、11名が9か月間の研修を修了しました。研修生は、福祉事業所などで忙しい業務をこなしながらも、概ね週1回、「座学での講義」や暑い中、寒い中での「ほ場実習」を通じて野菜の基礎知識や栽培管理の習得に向けて熱心に研修に取り組みました。

アンケートでは「今回学んだ内容を事業所内で共有し、できることから少しずつ検討していきたい」「農業を通じて利用者が楽しく安全に社会生活をおくれるようお手伝いしていきたい」「地域の農家や関係機関との連携を大切にしながら、試行錯誤を恐れず、学び続ける姿勢を持って農福連携に取り組んでいきたい」など今後の抱負に関する声が寄せられました。

研修生には、それぞれの職場で施設利用者が生き生きと農作業に取り組めるよう、研修で学んだ知識や技術を活用し、活躍されることを期待します。



SNS 投稿 diary

農大公式アカウント: Instagram・X(Twitter)
アカウント名 **「aichinoudai」**

通番 (投稿日) 内 容

134 (12月23日) けん引免許(農耕車限定)取得研修



134



135

135 (12月23日) 12/24 農産物実習販売



136

136 (12月24日) トマトのつる下げ作業



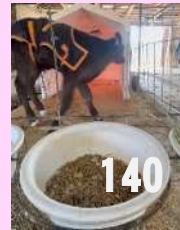
137

137 (12月25日) 牛の直腸検査



138

138 (12月26日) 牛の牛群検定



140

139 (12月26日) 門松を設置しました!



139

140 (12月28日) 酪農専攻1年生ムービー



141

141 (1月6日) 始業式



142

142 (1月6日) 1/7 農産物実習販売



143

143 (1月8日) 初釜(新年最初の茶会)



144

144 (1月9日) イチゴの初収穫



145

145 (1月9日) 農大祭実行委員会



146

146 (1月13日) 1/14 農産物実習販売



147

147 (1月14日) 皆で献血に協力しました!

148 (1月15日) 技能試験(大特・けん引)



148



149

149 (1月21日) 1/21 農産物実習販売



Follow Me !!

